

# 高高の伝統を継承

## 高崎高校応援部

高高は、翠巒祭や定期戦において見られるような、特異な校風と伝統で知られている。そういった独特の文化に惹かれ、高高を志望した新入生も多いのではないだろうか。



代々伝統を受け継ぐ応援部

今回は、そうした高高の伝統を代々色濃く受け継ぎ、数々の行事で先頭に立って活動している応援部の、第70代主将である江坂真乙くんを話を聞いた。

### — 主な活動内容 —

対面式に始まり、翠巒祭、定期戦などの行事で応援や校歌、応援歌の指揮を行なっている。普段は体育館裏で16時から17時まで1時間ほど練習をしている。

### — 応援部の伝統について —

代々、学生服、袴などの服装や部のルールを引き継いできた。これらは応援をする上での重要な作法であり、これらを継承し、守り抜くことで応援部と高高の伝統が成り立っていくと思う。

### — 新高生にメッセージ —

高高の外から来た人からすると、応援部は少し異質な存在だと思う。正直に言ってしまうと、自分も応援部にあまり良い印象を持ってなかった。それでも、機会があったら応援部に入部することになった。

## 新聞部紹介

高崎高校新聞部は、現在2年生6人、3年生4人の、計10名で活動しています。昨年10月の群馬県高校新聞コンクールにて、最高賞にあたる知事賞を受賞しました。

私たちが活動する上で一番大切にしているのは、「高高新聞部らしさ」です。例えば、鉄道が好きな部員は、Maxの愛称で親しまれるE4系新幹線がラストランを迎えた際にJRに取材をしたり、「狭軌」と「標準軌」を題材に「NOTE」を書いたりします。

「道しる兵衛」を作ったきっかけについては、「毎年、視覚障害者の事故が多く発生しているが、その対策はなかなか進んでいない。盲導犬も事故を防ぐことができるが、普及率は非常に低い。これらの問題がなぜ発生するのかと考えることが、『道しる兵衛』を作るきっかけ」と話した。

最後に、新入生に向けて、「これから高校、大学、企業で、社会問題に対して新しい解決策を考える機会が多い。その時、問題が発生した原因に興味を持ってもらいたい。たとえ原因が分からなくても、諦めずにチャンスだと思ってほしい」とアドバイスを送った。

## 主体的に課題を解決

### 物理部 高田くん

新高生生活について。高高は、自分のやりたいことが実現できる場所だと思ふ。そのためには、部活動や実行委員会などの団体に入り、その中で実績を積んでいくことが必要だ。生徒一人ひとりの成長が、高高の発展にもつながっていく。新入生には、自分の長所を伸ばせるような団体を選び、できることを探していくしてほしい。

「道しる兵衛」を真に社会実装するために、今後も開発を続けていきたい」と語った。さらに大切にしている視点として、「何事にも好奇心を持つことを心がけている。今回の『道しる兵衛』についても、最初に問題に興味を持たなければ、何も始まらなかった。これからも社会問題についてなぜそうなるのか、その原因に興味を持ち続けたい」と述べた。

最後に、新入生に向けて、「これから高校、大学、企業で、社会問題に対して新しい解決策を考える機会が多い。その時、問題が発生した原因に興味を持ってもらいたい。たとえ原因が分からなくても、諦めずにチャンスだと思ってほしい」とアドバイスを送った。



## 高高生よ 主体たれ

新入生諸君、受検お疲れ様。入学おめでとう。そして、大量の配布物の中から新聞に目を通して、しかも特に字が多い「論説」を読んでくれて、ありがとうございます。そんな君に質問を投げかけよう。ぜひ一緒に少し考えてみてほしい。高校は、「教育」の場だろうか。それとも、「学び」の場だろうか。おそらく、ほとんどの人は、高校は「教育」の場でもあるし、「学び」の場でもあると考えるだろう。そもそも、「教育」と「学び」に違いなどないと思う人だっているかもしれない。ここで、「教育」と「学び」の違いを

考えてみよう。両者には、明らかに異なる点がある。それは、行為の主体だ。「教育」の主体は指導者であり、「学び」の主体は生徒である。よって、もし、高校が教育の

場でもあり、学びの場でもあるとすれば、指導者と生徒がみな、主体として存在することが必要である。さて、今の高校がその要件を満たしていると言えるだろうか。群馬県のトップ校と言われる高高でさえ、全員がそのような主体であるとは言えないだろう。生徒の立場からすれば、定期考査や入学試験という名目で何度も「評

価」を下され、その良し悪しに一喜一憂し、比較の対象とされ、時には口を出されることがある。その中で主体性を失い、「学び」を億劫に感じるのは、当然である。これ



作業をする高田くんと物理部員

は、真に「学び」を実践することは、不可能だ。では、高校は、「教育」の場であるべきだろうか。それとも、「学び」の場であるべきだろうか。もちろん正解はないし、当たり前のことを言うが、「教育」も「学び」も両立するのが理想だ。つまり、指導者も生徒も主体であるべきだ。

新入生諸君、これから先、「教育」や「学び」と、それに伴う「評価」に苦しめられるかもしれないが、主体的な「学び」の感覚を、忘れないでほしい。いつか必ず報われる。高高生よ、主体たれ。

(都木)

---

---

---

---

---

---

---

---

---

---